

〈共同研究報告〉

小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(一)

鈴木貞美

東アジアの学術は、西欧近代のそれを受けとめることによって、伝統的なシステムを組み替え、日中韓それぞれに独自のものを築いてきた。日本の帝国大学が、ヨーロッパ学術組織のおおもとであるキリスト教の神学部にあたる学部をもたず、文学部内に宗教学を抱え、また科学＝技術概念の形成が著しく早く、工学部を、さらには農学部をもつユニークな総合大学を欧米に遥かに先駆けて発足させたことを象徴的な事例としてあげることができる。これは大学制度に関心をもったことのある人なら誰でも知っていることであるが、しかし、そうした制度上のちがいが、諸分野の学術内容の展開にも大きなちがいを生んできたことについては、ほとんど等閑視されてきた。このような独自性をさらに広く明らかにし、地球環境問題などを抱える二十一世紀の学術の展開に積極的に活かす方途を日・中・韓・台の研究者とともにさぐることを目的に、二〇〇四年度より、日文研の共同研究会を発足させ、それを基礎にして、種々の資

金を利用し、国際シンポジウム(毎年一、二回)を開催してきたが、とりわけ最近、東アジアにおいて近代概念と概念編成に関する研究がさかんになりつつあり、さらに国際連携を強めているところである。

この研究は、しかし、方法論の確立をはじめ、研究が進めばすむほど、克服すべき多くの課題が見つかるという段階にあり、途中経過を報告しつつ、研究の発展を展望してゆくのが適切と考える。そこで、本誌に随時、「小特集」を組み、報告を掲載してゆきたい。「小特集」第一回は、東晴美「劇評ジャンルの文化史―近代への転換」、鈴木貞美「明治期日本の啓蒙思想における『自由・平等』―福沢諭吉、西周、加藤弘之をめぐって」、須藤遙子「八研究ノ―ト」『自衛隊協力映画』というジャンル―田母神論文との共通性とマス・メディアとの関係』の三本を掲載する。

東晴美論文は、総合研究大学院大学文化科学研究科の博士論文

(二〇〇九年)の一部をまとめなおしたもののだが、「劇評」をひとつの文化ジャンルとして立てることによって、江戸時代の出版史研究に、また明治期以降の文学研究に、新たな視野が拓けることを端的に示す画期的なものと判断する。

鈴木のものは、「自由」「平等」の両概念をセットにして考えることによつて、江戸時代から明治啓蒙思想への概念の組み替えについて、先行研究を超える見解を提示しうることを明らかにした。

須藤遙子の研究ノートは、現代日本文化をテーマとするもので、「自衛隊協力映画」というジャンルを立てることによつて、そこに今日の自衛隊をめぐる意識の諸問題があぶりだされてくることを示した調査報告として興味深いものと思う。

いずれも概念やジャンルの研究が各専門分野の研究の発展に寄与することを示すものであり、日文研の共同研究会代表の資格と責任において、ここに掲載する。